

『金閣寺』論

三島由紀夫の変身物語として

A CRITICAL ANALYSIS OF *KINKAKUJI*

As a metamorphosis of Mishima Yukio

許 昊*

In Mishima Yukio's works there are series of novels called "novels of individuals". They seem to have started with *Tōzoku* (The Thieves), but the first time Mishima used this term "novels of individuals" was in *Kinkaku-ji* (The Temple of Golden Pavilion). Then this term was handed down to *Kyōko No Ie* (House of Kyoko), and to his posthumous work, *Hōjō no Umi* (The Sea of Fertility). Each of these series of novels has both "an outward theme" and "a hidden theme." In the case of *Kinkaku-ji*, though the theme of "beauty" comes to the front, it is no more than a motive of the arsonist, and Mishima himself never commented on beauty, referring to *Kinkaku-ji*. Therefore, the theme of "beauty" is only "an outward theme," and "a hidden theme" should be another.

One remarkable thing about *Kinkaku-ji* is that he had started body building just around when he was writing this novel. That is to say that Mishima wrote *Kinkaku-ji*, while seeing his own

*HUH Ho 筑波大学大学院。韓国外国語大学大学院修了。論文に「谷崎と三島 —『ドリアン・グレイの肖像』からの影響を中心に—」「<春子>論—三島由紀夫の未亡人小説考—」などがある。

muscles increasing. Moreover, he once recollected that “I studied ‘the female principle’ thoroughly in my twenties, and ‘the male principle’, in the thirties”. Mishima’s thirties began with *Kinkaku-ji*. Naturally this novel marks the beginning of ‘the male principle’. His essays written in this period, such as “*Waga Miseraretaru Mono*” (What Really Attracted Me), “*Jiko Kaizō No Kokoromi*” (The Trial of Rebuilding Myself), “*Body building Tetsugaku*” (The Philosophy of Body Building). “*Boxing to Shōsetsu*” (Boxing and novels), his desire for metamorphosis and his longing for masculinity are apparant. Since this novel was written during the time of his transition from ‘the female principle’ to ‘the male principle,’ it was rendered with the same purpose of transition. Hence, the hero’s desire for metamorphosis leads to his arsoning of Kinkaku-ji Temple. Besides, Kinkaku-ji temple represents Uiko. That is, Uiko is also the symbol of ‘female principle.’ By analyzing the relation among Mizoguchi, Uiko, and Kinkaku-ji temple, I followed the process of Mizoguchi’s transition to ‘the male principle’; he achieved it by conquering ‘the female principle’ in the arsoning of Kinkaku-ji Temple. And I figured it as its ‘hidden theme.’

— 変身願望について

三島が『金閣寺』の雑誌連載中に書いたエッセイ「自己改造の試み」（昭和31・8）には「文体の私に於ける変遷は、感性的なものから知的なものへ、女性的なものから男性的なものへの変化を物語っている」という記述が見られる。更に『絹と明察』が昭和三十九年度第六回毎日芸術賞を受賞したとき、「朝日

新聞」とのインタビューで三島は再び「二十代には女性的原理、三十代には男性的原理を追求した」と語っている。三島の言葉どおりならば、変身は「女性的原理」から「男性的原理」への移行をとという結果を齎したことになる。この他にも「わが魅せられたるもの」・「ボディ・ビル哲学」・「ボクシングと小説」など、『金閣寺』を前後して書かれたエッセイには自己の改造もしくは変身への願望が多く見られる。

三島の変身願望の根源は「私に余分なものといえば、明らかに感受性であり、私に欠けているものといえば、何か、肉体的な存在感ともいうべきものであった」（『私の遍歴時代』昭38・5）という一言に尽きる。この「肉体的な存在感」をモノにするために三島がボディ・ビルを始めたのは昭和三十年九月であり、『金閣寺』の雑誌連載が始まったのは翌年一月からである。いわば『金閣寺』は三島が自分の体に筋肉が日増しに増えるのを眺めながら書いた作品ということになる。また、『金閣寺』以前の一年間は目星い作品もないために、「男性的原理」の出発点を一応『金閣寺』に置いて無理はないだろう。

『金閣寺』よりも七年前に発表された『仮面の告白』には「私はただ生まれ変わりがかったのだ」という主人公「私」の変身願望が見られる。三島が二十代の半ばから実験的な作品を多く書いたのはよく知られているが、その実験と言うのは多分変身願望から生まれたものと思われる。しかし当時はこれというほどの決定的な作品がなく、テーマ自体もかなり揺れ動いた痕跡がある。その変身願望を或る程度成功の段階にまで持ち込んだ作品が『金閣寺』である。

二 「個人の小説」とは

三島は意外にも『金閣寺』に関連しては口数が少なかったが、「十八歳と三十四歳の肖像画」（昭34・5）では「やっと私は、自分の気質を完全に利用して、それを思想に晶化させようとする試みに安心して立戻り、それは曲りなりにも成功して」と自ら成功作として評価した上で、「『金閣寺』で個人の小説を書いたから、次は時代の小説を書こうと思う。（『鏡子の家』進行中）」と語っ

ている。ここで三島は『金閣寺』のあと直接『鏡子の家』を持ち出しているが、『金閣寺』と同時期に『永すぎた春』が書かれ、引き続き『橋づくし』・『女方』・『美德のよろめき』などの佳作も発表している。ところが三島はあくまでも『金閣寺』と『鏡子の家』に拘っており、ここには明らかに一連の作品に対する三島の特別な配慮が感じられる。

三島自身は『金閣寺』を名指して「個人の小説」と称したが、『金閣寺』が出来上がるまでには幾つもの「個人の小説」らしきものが書かれている。その最初と思われるのは『盗賊』である。当時のエッセイ「私の文学」(昭23・3)には、「人に誤解されることが妙に好きで、誤解された自分を押し立ててその裏で告白する喜びに少し重きをおきすぎた」という個所が見られ、一つの作品に意図的に「表のテーマ」と「裏のテーマ」を合わせて用いたことを明かしている。これを「個人の小説」の原点とするならば、「個人の小説」の定義は、一つの物語に二つのテーマを用いた告白小説とでも言えるだろう。

『金閣寺』以前の「個人の小説」の系列として考えられる作品は『盗賊』・『仮面の告白』・『愛の渇き』・『禁色』などがある。これらの作品と『金閣寺』との関係を大ざっぱに述べれば次のとおりである。

最初から主人公溝口を生まれつきの孤独な人間として設定した上で、徐々に孤立の極限状態まで追い込んで行き、最後に放火の必然性を導き出している『金閣寺』の作品構造は、ひとまず『盗賊』の藤村明秀が失恋して心中するまでの心的経過とかなり類似している。特に出奔した溝口が裏日本の海を眺めながら放火を決心する場面の描写が、旅に出た明秀が神戸の海を眺めながら自殺を決意する場面そのままである。また、有為子の死後、溝口が金閣と出会い、金閣との関係が変化した段階で柏木を登場させる『金閣寺』の流れは、明秀の失恋が決定したところで、もう一人の作者の化身である山内男爵を起用して作品の新たな展開を見せている『盗賊』と類似している。『盗賊』が作品の裏で、登場人物の構成に家族関係を絡ませたのもやはり『金閣寺』に影響を及ぼしているような気がする。

『仮面の告白』では第一章に「三つの前提」を出した上で話を進め、作品全体の統一を図っている。この「三つの前提」に該当するものが『金閣寺』の第一章にも見られるが、それについては次章で論ずることにする。もう一つ、『金閣寺』は『仮面の告白』の反動として生まれた作品である事も指摘しておくべきであろう。「幼時から父は、私によく、金閣のことを語った」という冒頭文もさることながら、溝口の成長環境に関する紹介は同性愛の介入の余地を与えない。また、柏木が溝口と大谷大学のキャンパスを歩きながら、「マラソンの練習者たち」を見かけて「阿呆な奴らだな」、「あのざまは一体何だろう。奴らが健康だというのか。それなら健康を人に見せびらかすことが何の値打ちがあるんだい」とけなす場面も、『仮面の告白』の「私」が若者たちの肉体に憧れる同性愛者であるのとよい対照を成している。

『愛の渴き』の場合、ヒロイン悦子の過去が、場所を舅彌吉の農園に移して新たな形で展開されているが、『金閣寺』で、第一章に見られる溝口の過去が鹿苑寺での生活に様々な影響を及ぼしているのもやはり同じ技法である。更に作者と悦子との関係が、溝口と有為子との関係に転化された可能性も高い。

三島が初めて行為と認識の問題を大きく取上げたのは『禁色』である。『愛の渴き』においても「精神」と「肉体」の問題は取り上げられているが、その「精神」は「認識」と呼ぶほどの知性を備えていなかったし、「肉体」もまだ作者自身にはならず、他者の立場に留まっていた。『禁色』も厳密に言って、主人公南悠一が行為者に成りきっていない点で、行為と認識の段階には至っていないが、俊輔の論理はそれなりに完成度が高いものである。但しここで明らかなのは、同性愛が即ち「男性的原理」でもなければ、「行為」のための必須条件でもないということである。

しかし「個人の小説」として何よりも大事な点は、作品の構造面よりも人物構成にある。主人公は大體、身体的な特徴・経歴・家族関係など様々な形で必要以上に作者との類似点を持っており、ヒロインの場合は必ず家族の誰かを象徴している。また、作者の化身として複数の人物が設定されているのも、変身

願望の一種として、大きな特徴をなしている。

三 三つの前提

『仮面の告白』は第一章で「糞尿汲取人とオルレアン少女と兵士の汗の匂い」・「松旭斎天勝とクレオパトラ」・「殺される王子」の三つの挿話を「三つの前提」として回想した後、それに関連して順序よく主人公の告白を展開させることで作品全体の統一を図っている。『金閣寺』にもやはりその「三つの前提」に該当するものが第一章に見られる。

その最初は、主人公の成長環境及び身体的な特徴である。作中には溝口の生まれ故郷ではなく「父の故郷」が次のように紹介されている。

父の故郷は、光のおびただしい土地であった。しかし一年のうち、十一月十二月のころには、たとえ雲一つないように見える快晴の日にも、一日に四五へんも時雨が渡った。私の変わりやすい心情は、この土地で養われたものではないかと思われる。（下線引用者）

「私の変わりやすい心情」が「父の故郷」で養われたというのは、「幼時から父は、私によく、金閣のことを語った」という冒頭文とともに、溝口が専ら父親の影響の元に育ったことを意味する。処女作『酸模』以来十六年間、一貫して父親を作中から排除してきた三島が『金閣寺』に至っていきなり冒頭から父親の影響を持ち出しているのは、『金閣寺』が新しいテーマによる作品であることを匂わせている。『仮面の告白』で成長環境における祖母からの影響が「私」の一生を決定したのを念頭に置けば、父の影響が溝口の一生を決定するのは避けられないものになる。鹿苑寺の住職に頼んで溝口を徒弟入りさせたのも父である。溝口と父との関係は、初めて京都に向う列車の中で溝口が「父の国民服の胸にかけられた袈裟を見、血色のよい若い下士官たちの金釦をはね上げているような胸を見た」時、「父の司っている死の世界と、若者たちの生の

世界」に自分は「股をかけている」と感じる場面に象徴されている。従って「父の死によって、私の本当の少年時代は終る」というのは、いよいよ溝口が「二つの世界」のいずれかを選択しなければならない岐路に立ったことを意味する。最後に溝口が「生の世界」を目指して金閣に火を放つ行為の必然性はここに内包されている。

溝口に影響を与えたのが父であるならば、母が作中から排除されるのは避けられない。溝口が母の不倫の現場を目撃した話や、「母があくまで私と別の世界に住んでいる殊に気づいた」という個所にもそれが表れているが、後に「母がもう決して私を脅かす事ができなと感じた」と語るところで母は作中から完全に切り離されてしまう。

一方、吃音のことは、認識への唯一の道である言葉を溝口から奪い、行為に走らざるを得ない宿命を担わせている。

二つ目の挿話は、溝口が海軍機関学校の生徒が脱ぎ捨てておいた短剣の鞘に傷をつける話である。これが放火の予兆の意味を持つのは、河上徹太郎氏によって指摘され、中村光夫^①・三枝康高氏^②らの支持を受けている。このように、後に来るべき大事件を暗示する挿話を予め持ち出す手法は『愛の渇き』に早くも見られる。ヒロイン悦子が祭の最中に三郎の背中に爪で鋭い傷をつける場面は、最後の三郎殺しを暗示している。また、後に書かれた『午後の曳航』でも少年たちが猫を解剖する場面が龍二の死を暗示している。

しかし短剣の鞘に傷をつける溝口の行為は、あくまでもモデルになった放火犯林承賢の犯行動機である「美に対する嫉妬」を「表のテーマ」として成立させるためのものである。もしこの行為を以て作品が一貫しているならば『金閣寺』は溝口の死で終る筈である。ところが溝口は最初から「生の世界」を目指しており、放火後も「生きよう」と決心する。小林秀雄氏との対談「美のかたち」で、三島は放火犯林承賢に対してかなりの反感を示しているにもかかわらず「美への嫉妬」を作中に活かした理由は、一応「時事小説」としての体裁を整えるとともに、「裏のテーマ」を語りやすくするところにあったと思われる。

従って次に来る挿話は自ずと「裏のテーマ」に繋がるものになっている。

三つ目の挿話は、溝口が有為子を待伏せしたことと、有為子の死にまつわる「悲劇的な事件」の二つに分かれる。まず待伏せのことであるが、『金閣寺』以前にも三島は肉慾に絡む男女関係を『春子』・『燈臺』・『愛の渴き』・『牝犬』・『水音』などで描いたことがあるが、いずれも近親相姦的なイメージを漂わせており、一応有為子も近親者の誰かの象徴である可能性が高い。溝口は有為子から軽蔑的な言葉を浴びせられ、待伏せは惨めな結果で終わるが、これは三島の作品では初めて見る、「権柄づくな態度をとる」女への挑戦である。この挑戦はやがて「商売の女」の腹を踏む行為や、五番町での初体験を経て、金閣への放火にまでエスカレートして行く。これは純粋な三島の創作として「裏のテーマ」を成立させている。

有為子の死にまつわる「悲劇的な事件」は、有為子を冒頭から死なせる必要から語られたものであるが、彼女が死際に見せた「拒否にあふれた顔」・「美しかった瞬間」・「世界を全的に拒みもしない。全的に受け容れもしない」姿などは、後に金閣にそのまま象嵌されるようになる。戦時中「私を焼き亡ぼす火は金閣をも焼き亡ぼすだろう」という考えは、私をほとんど酔わせた」という溝口の告白は、有為子が死際に見せた美を金閣が再現してくれることを希ってのことであろう。この有為子を冒頭から死なせた理由は、死後の彼女の影響を語る必要があったからである。ここで再び浮上する事実は、有為子が三島にとって死後も尚その影響力を揮っている近親者、つまり祖母の象徴だということである。「権柄づくな態度をとる」有為子には或る程度祖母のイメージが活かされているが、死後の有為子を象徴する金閣の描写が「威厳にみちた、憂鬱な繊細な建築。剥げた金箔をそこかしこに残した豪奢の亡骸のような建築」となっているのも祖母像にかなり近づいている。

四 柏木という鏡

作中には溝口の友人として柏木と鶴川が登場する。溝口・柏木・鶴川はそれ

ぞれ作者にとって行為・認識・純粹を象徴する人物である。鶴川の場合、ことごとく溝口とは対照的に設定されており、溝口の陽画的な存在として、溝口の生の暗さを際立たせるところで一応役割が終る。柏木の場合は内翻足である以上、行為者にはなれず、生まれつきの認識者として、吃りの溝口とよい対象を見せているが、鶴川のように別世界の人間ではなく、「厭人的」な暗さが溝口と同類の人間としての印象を与える

溝口と柏木の初対面は、柏木の自己紹介から始まる。「寺の檀家の子」との関係に失敗した柏木は、「六十歳だともいわれ、それ以上だともいわれた」「老いた寡婦に目をつけ」て童貞を捨てる。このような「童貞を破った顛末」を溝口に聞かせる理由を柏木は「どうやら俺のやって来たことは多分君にとってちばん値打ちがあり、俺のやって来たとおりにすれば、多分それが君にとって一等いい道だと思われたからだ」と説明する。溝口は柏木から「人生」を期待し、それを暗示するものとして女の話を持ち出す。柏木は次のように答える。

女かい？ ふん。俺にはこのごろ、内翻足の男を好きになる女が、カンでちゃんとわかるようになった。女にはそういう種類があるんだよ。内翻足の男を好きだということは、もしかすると一生隠されたまま、墓場へまで一緒にもって行きかねない。その種の女の唯一の悪趣味、唯一の夢なんだが。

そうだな。内翻足の好く女を一目で見分ける法。そいつは大体において飛切りの美人で、鼻の冷たく尖った、しかも口もとのいくらかだらしのない……（下線引用者）

柏木は有為子を知らないにもかかわらず、答はそのまま有為子に当て嵌まるものになっている。二人が話しているところへ丁度「内翻足を好く女」の典型が現れる。溝口は当然その女の「冷たい高い鼻、いくらかだらしのない口もと、うるんだ目」から「月下の有為子の面影」を見る。二人が彼女に連れられて

「スペイン風の洋館の耳門を」くぐろうとした時、溝口はその女の正体が柏木の語った「墓場まで一緒にもって行きかねない」女だと悟り、一人で逃げ出してしまう。

金閣のところへ逃げ帰った溝口は、『私の人生が柏木のようなものだったら、どうかお護り下さい。私にはとてもたえきれそうもないから』と祈り、「柏木が暗示し、私の前に即座に演じてみせた人生」に「私が大いに惹かれ、そこに自分の方向を見定めたことも事実であった」と告白する。

五月になって柏木は遊山の計画を立て、溝口を誘う。この遊山には二人の女が同行するが、一人は例の「内翻足を好く女」であり、もう一人は柏木の下宿の娘である。この二人の女に関する描写が対照的であるのは極めて大事な意味を持つ。

一人はたしかにあの女であった。高い冷たい鼻、だらしない口もと、舶来生地洋服の肩から水筒をかけた美しい女。彼女の前では小肥りした下宿の娘は、身につけているものも容貌を見劣りがした。小さな顎と、括ったような唇だけが娘々していた。

「内翻足を好く女」が有為子に似ているのは既述したが、柏木の足を嘗めるなど至れり尽せりに仕く彼女から溝口は「いつか柏木の話した六十幾歳の老婆の顔」を思い出して恐怖に戦く。この場面には、「内翻足を好く女」を媒介に有為子と「老婆」とが繋がることで、祖母の過保護下に育った作者の幼少時代が象徴されている。ここに祖母のイメージが隠されているのは後ほど再び論ずることにする。

一方「下宿の娘」はどこにも有為子のイメージをとどめていない。柏木はこの「下宿の娘」を溝口に紹介して、自分が「寺の檀家の子」との関係に失敗したのと同じ経験を味わわせる。金閣が現われることで溝口は失敗するが、この時はじめて金閣の正体が「私と、私の志す人生との間に立ちほだか」る存在で

あることに気づく。これは、もっと分かりやすく解釈すれば、溝口が有為子以外の女に対しては不能であることを意味する。柏木はその事実を溝口に悟らせるために「下宿の娘」を紹介したのである。

柏木は溝口を相手に多くのものを語るが、溝口が柏木に自分のことを語る場面は殆ど見られない。二人の対話がいずれも柏木の一方的な自己顕示に終るのは、柏木の役割が溝口に対して鏡的な存在であることを意味する。溝口はいつも柏木を通して自分の立場に気づき、進むべき方向を決める。作中には柏木の正体を暗示した挿話の一つ語られている。それは溝口が柏木の下宿で見たポスターを思い出す場面であるが、旅行協会が発行した「日本アルプスを描いた」ポスターには、もともと「未知の世界へ、あなたを招く！」というスローガンが書いてあったのを、柏木が「未知の人生とは我慢がならぬ」と書き換えて置いたのである。「未知の人生」とは溝口が目指す人生である。それを否定する柏木はいわば、現状を固持しようとする男として、「女性的原理」に生きる人間である。「それに私が大いに惹かれ、そこに自分の方向を見定めたことも事実であった」という溝口の言葉の真意はここにある。

ところが溝口は柏木を否定しない。柏木は柏木なりに認識者として一応完成された人間である。溝口はただ柏木と別の人生を目指すだけで、二人が対立するのではない。むしろ柏木は、誤って溝口が認識の世界に足を踏み入れることがないように、わざと認識の嫌悪的な一面を見せたりする。『禁色』の檜俊輔が南悠一を操っているかのように見えながら、実は悠一が自立できるよう徹底的に援助しているのは柏木と類似している。しかしその俊輔が最後に滅びてしまう点で柏木と違う。むしろ友人としての柏木の役割は、「同じ根から出た植物」として「豊饒の海」の本多繁邦に近いような気がする。

五 有為子

溝口は父から「金閣ほど美しいものは此世にない」と教わって以来、「美しい人の顔を見ても、心の中で、『金閣のように美しい』と形容するまでになっ

ていた」。作中に金閣と有為子とを直接比較した個所は見られないが、当然溝口は有為子を見るたびに「金閣のように美しい」と思った筈である。しかも有為子は溝口が現実で最初に接した美である。有為子が死んでから溝口が金閣と会うようになってるのは、金閣の美を測る尺度が有為子であることを意味する。「どうあっても金閣は美しくなければならなかった」というのは、有為子の亡き今、同等の美を金閣から求める溝口の心境である。それは「金閣そのものの美しさよりも、金閣の美を想像しうる私の心の能力に賭けられた」ものであった。従って、金閣の美は有為子の美の再現にならざるを得ない。

柏木が女たちとの関係を通して溝口に見せた幾つかの暗示は、その女たちが有為子を思わせる点で、溝口に有為子への対処策を教えたようなものである。溝口が柏木に有為子のことを語る場面は見られず、多分柏木は有為子を知らない筈である。しかし第六章の、溝口と柏木が「『南泉斬猫』の公案」を語り合う場面では、「猫の美」が金閣よりも殆ど露骨に有為子に準えられている。「あれは人の一生に、いろんな風に形を変えて、何度も現れるものなんだ」・「たとい猫は死んでも、猫の美しさは死んでいないかもしれない」という柏木の言葉は、死後もなお至るところで溝口の前に姿を現わす有為子の幻影そのままである。後に溝口は「死も有為子にとっては、かりそめの事件であったかもしれない」と悟るようになる。溝口は柏木の話から「解釈はいかにも柏木一流のものであったが、それは多分に私にかこつけ、私の内心を見抜いて、その無解決を諷しているように思われた」と感じる。柏木は更に「今のところは、俺が南泉で、君が趙州だが、いつの日か、君が南泉になり、俺が趙州になるかもしれない」と語る。これは、いつか溝口が何らかの方法で有為子の幻影を放逐するだろうという予言である。第九章の、「南泉和尚は行為者だったから、見事に猫を斬って捨てた」という柏木の言葉は、有為子の幻影を放逐すること、即ち金閣への放火が、「行為者」になる道であることを暗示している。

第九章で溝口は五番町へ出かける。それまで何度も女との関係に失敗した溝口がわざわざ遊郭に出かけた理由は、柏木が「並の人間なら」「商売女で以て、

童貞を破ろうと心掛け」ると言ったとおり、「並の人間」になるためである。ここではもはや金閣は再び有為子に還元されており、「私の足がみちびかれてゆくところに、有為子はいる筈だった」というのは、溝口が女との関係を企むたびに金閣が現われた経験から出た言葉である。然し「有為子は留守だった」。

有為子が留守だとすれば、誰でもよかった。選んだり、期待したりしたら、失敗するという迷信が残っていた。女が客を選ぶ余地がないように、私も女を選ばなければよいのだ。あの怖ろしい、人を無気力にする美的観念が、ほんのわずかでも介入して来ないようにしなければならぬ。（下線引用者）

有為子が留守だということは、金閣の留守を意味する。従って女との関係が金閣に邪魔される恐れはなくなり、溝口は無事にことを済ませる。翌日再び同じところへ行った溝口は「思い出せぬ時と場所で、(多分有為子と)、もっと激しい、もっと身のしびれる官能の喜びをすでに味わっているような気がする」。ここに「(多分有為子と)」と括弧されているのは、それまで溝口が金閣を通して味わった全ての恍惚感の実体が有為子であったことを表している。

六 放火の意味

小林秀雄との対談で三島は放火犯林承賢への嫌悪を露にしているが^③、作品では溝口の放火を犯罪的な次元から切り離し、内面的な必然性にうまく結び付けている。それは勿論溝口の外面がモデル林承賢であり、内面が三島自身だからである。

最初、金閣はその「悲劇的な美しさ」や「周囲の世界を拒んでいる」姿から、「悲劇的な事件」の際に有為子が見せてくれた「世界を拒んでいる」美しさと通じていた。終戦までの一年間を溝口が「私が金閣と最も親しみ、その安否を気づかい、その美に溺れた時期である。どちらかといえば、金閣を私と同じ高

さにまで引下げ、そういう仮定の下に、怖れげもなく金閣を愛することのできた時期である」と回想したのは、多分、有為子と同棲でもしたかのような心境で語ったのであろう。その時の金閣の美は「人生から私を遮断し、人生から私を護っていた」。

しかし金閣との決別は溝口の成長とともに始まる。終戦の日、溝口が金閣を眺めながら、「『私たち』の関係がすでに変わっている」・「きのうまでの金閣はこうではなかった」と思ったのは、一見金閣が変貌したかのように見えるが、その実敗戦は「日常のなかに融け込んでいる仏教的な時間の復活」であり、溝口自身の変貌が避けられない事態になったのである。

やがて溝口が自分の変貌を自覚せざるを得ない事件が起こる。それは鹿苑寺の境内で溝口が「商売の女」の腹を踏んだことである。この「商売の女」が「有為子の記憶に抗して出来た影像の、反抗的な新鮮な美しさを帯びていた」とはいうものの、溝口が彼女から有為子を感じたのは事実である。この事件は、有為子に対抗する勇気を溝口の内部に吹き込み、金閣を敵に廻す結果になる。後に溝口が亀山公園で「下宿の娘」と関係しようとしたとき金閣が現われて邪魔したのは当然の結果である。そこから溝口の内部には一つの自覚が生じる。

このころから微妙な変化が、私の金閣に対する感情に生じていたものと思われる。憎しみというのではないが、私の内に徐々に芽生えつつあるものと、金閣とが、決して相容れない事態がいつか来るにちがいないという予感があった。亀山公園のあのときからこ、この感情は明白になっていたが、私はそれに名をつけることを怖れた。(下線引用者)

「私の内に徐々に芽生えつつあるもの」というのは多分「男性的原理」であろう。その場合金閣は「女性的原理」になる。溝口に「下宿の娘」を紹介することで、この二つの原理による葛藤を自覚させてくれたのは柏木であるが、柏木はさらに「『臨濟録』の示衆の章」及び「『南泉斬猫』の公案」を用いてその

解決策をも暗示してくれる。

柏木が紹介してくれた二人目の女は「生花の女師匠」である。溝口が彼女を初めて見たのは柏木と出会う前のことで、その時は「たしかにあの女は、よみがえった有為子その人だ」と思ったことがある。しかし「その人がすでに、柏木によって、つまり認識によって汚されている」今ではもはや有為子のイメージから完全に遠のいてしまい、「下宿の娘」と何ら変りのない日常の女になっている。溝口が彼女と関係しようとする瞬間、再び金閣が現われたのは当然である。もし彼女が柏木によって汚されず、有為子のイメージをそのまま持っていたならば、金閣は現われなかったに違いない。しかしその場合、溝口は認識の世界に手を染める結果になるが、そのようなことがないように柏木は細心の配慮をしている。この失敗を通して溝口はいよいよ「いつかきっとお前を支配してやる。二度と私の邪魔をしに来ないように、いつかは必ずお前をわがものにしてやるぞ」と決心する。

この決心には「それにしても、悪は可能であろうか？」という疑問が伴う。ここに至って「悪」を持ち出すのはかなり不自然であるが、多分、金閣が有為子から更に遡り、祖母にまで繋がっているからであろう。柏木が語った「『臨濟録』の示衆の章」には「仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺し、…^④」という個所があり、「祖」のことがそれとなく出されているが、柏木が童貞を捨てた時の相手が「老いた寡婦」だったことを合わせて考えるならば、『仮面の告白』に見られる祖母の影響が「女性的原理」の根源である可能性はかなり高くなる。また、金閣の出現によって「生花の女師匠」との関係に失敗した溝口が、

「又もや私は人生から隔てられた！」と独言した。「又してもだ。金閣はどうして私を護ろうとする？ 頼みもしないのに、どうして私を人生から隔てようとする？ なるほど金閣は、私を墮地獄から救っているのかもしれない。そうすることによって金閣は私を、地獄に墮ちた人間よりもっ

と悪い者、『誰よりも地獄の消息に通じた男』にしてくれたのだ」

と怒る場面では、『仮面の告白』に見られる祖母の過保護ぶりが金閣と完全に重なっている。

学校も鹿苑寺の生活も金閣との関係も、全ての面で八方塞がりの状態になった溝口は出奔し、裏日本の海を眺めながら『金閣を焼かなければなるぬ』と決心する。鹿苑寺に戻った溝口が金閣を焼く準備の一環として五番町に出かけるのは、放火のあと自分が新しい生に耐え得る人間であるかの試金石の意味がある。そうして五番町で女との関係に成功した溝口は本格的に放火の準備に取りかかる。

放火に当って、二つの大事なことが語られている。一つは溝口が「何故私は敢えて私でなくなろうとするのか」と自分に問いかける場面である。これは放火が世間を変える行為ではなく、自分自身の変身を目的にしていることを表す。もう一つは、行為の寸前になって無力感に陥っていた溝口が、柏木の語った「『臨濟録』の示衆の章」を思い起こす場面である。そこには再び「仏に逢うては仏を殺し、祖に逢うては祖を殺し」という言葉が繰り返され、放火と祖母との関わり合いが再確認されている。『金閣寺』の雑誌連載が終わってから数ヶ月後三島は次のようなことを書いた。

西洋の芸術には、エディポス王以来、親殺しのテーマがたびたび出て来る。日本のように「寺子屋」はじめ、子殺しのテーマが多く、今でも一家心中の多いのと好個の対照をなしている。社会を進歩させ、時代を革新する強烈な力は、子殺し精神よりも親殺し精神のほうに、多く含まれているようである。（「親殺しの精神」、昭32・3）

三島は「女性的原理」を「子殺し精神」として、「男性的原理」を「親殺し精神」として解釈しているらしいが、この発言には『金閣寺』の成功による自

信感がそのまま表われている。「内翻足を好く女」を「あの女は羅漢だったんだ」と柏木が言った時、溝口が「それで君は解脱したのか」と質問したことがあるが、柏木が「それには未だ殺し方が足らんさ」と答えたのも、その裏に有為子を、更にその裏に祖母を感じさせる。

以上のような経過を辿った放火ならば、放火後の溝口には新しい人生への手ごたえが十分あった筈であり、従って「生きようと私は思った」という最後の一句は、単なるどんでん返しではなく、必然的な帰結だったのである。『盗賊』の明秀が死を以て美子への復讐を企んだのに比べると、有為子を克服することで生を我ものにした溝口には、作者の変身ぶりがそのまま映し出されている。

七 二つの原理

『金閣寺』は溝口が放火直前、無力感に陥って行為を躊躇しながら過去を回想する形をとっており、作品の殆どが回想譚からなっている。従って放火という現実の行為は過去と未来を結ぶ境目としての意味を持つ。

「私の遍歴時代」には、『仮面の告白』を書いてから「何としてでも、生きなければならぬ」と思ったという記述が見られる。『愛の渴き』と『禁色』が生き残る側の論理を借りて書かれた作品であることを考えれば、当時の三島に「生きなければならぬ」という意識が強く働いていたのは事実であるらしい。その延長線上で考える場合、「男性的原理」を獲得するために書かれた「個人の小説」としての『金閣寺』は、それに相応しい内容を持った作品と言えるだろう。

三島の親友である村松剛氏によれば、三島は『春の雪』の雑誌連載が終りに近いころ、「あれは私小説なんだよ」（「三島由紀夫の世界」、村松剛著、平2・9、新潮社刊）ともらしたと言う。『春の雪』はもちろん三人称小説であるが、三島が「私小説」と言ったのは多分「個人の小説」を指すものと思われる。それならば『盗賊』から始まった「個人の小説」の系列は、『金閣寺』で完成し、遺作『豊饒の海』にまで繋がることになる。

一方「男性的原理」は、「三十代は男性的原理を追求したわけですが、来年からはまた次のテーマに取り組むことになるでしょう。いまその準備をしているところです」という言葉から、三十代だけの原理であるかのように見えるが、これもまた『豊饒の海』にまで尾を引いている。澁澤龍彦氏が『奔馬』と『暁の寺』とを比較して「男性の原理が出てくれば、次に女性の原理が出てくるのは当然なのだ」^⑤と評したごとく、『豊饒の海』にはこの二つの原理が混在しており、三島の言う「新しいテーマ」とは多分「男性的原理」と「女性的原理」との融合であつたらしい。従つて「男性的原理」が最後まで生きていたのは勿論、『金閣寺』によつて一時期放逐されていた「女性的原理」も『豊饒の海』に至つて復活したと見なければならぬ。中村光夫氏との対談で三島は次のように語つたことがある。

（前略）ぼくは自分の小説はソラリズムというか、太陽崇拜というのが主人公の行動を決定する、太陽崇拜は母であり天照大神である。そこへ向つていつも最後に飛んでいくのですが、したがつて、それを喰すのはいつも母的なものなんです。（中略）

日本人の行動性の裏にはおふくろがべつたりくつついている、それを発見するのです。ぼくの小説の場合には、第一巻では非おふくろ的な女性がヒロインになつて、彼女は主人公と恋愛して、ちょっとおふくろ的な擬装をするけれども、完全な女になつちゃう。第二巻ではおふくろで通しちゃつてゐる。ずいぶんいろいろな文献を読んで、そういうすじを考え出した。いくら女を締め出してもだめです。最終的にはおふくろが出てくる。（『対談・人間と文学』、昭43・4、講談社刊）

ここで「いくら女を締め出してもだめです」というのは、『金閣寺』による「女性的原理」の放逐、および「豊饒の海」における「女性的原理」の復活を考えれば頷ける話である。

『金閣寺』は作品の性格上、一つの小論文の形で以て作品論を書くのは非常に難しい。まるで精密機械のように作品全体が連動していて、或る一部分だけを切り離して論ずる場合、誤解を招き易くなっている。三好行雄氏が三回^⑥に亙って『金閣寺』論を書いたのもそのせいであろう。本稿に於いても論の拡散を出来る限り抑えようと努力したが、抑えが利かなかったところが多少あるような気がする。越次俱子氏は「三好行雄を頂点として、『金閣寺』の研究は三好・中村・山本・新藤、そして磯田の各々論文によって、昭和三十年代から四十年代初めにかけて、出揃ってしまった」（『国文学』昭62・7、臨時増刊号）と評したが、本稿で論じてみた「個人の小説」および「裏のテーマ」に関してはまだ一顧の余地が残されているように思われる。

注

- ① 「『金閣寺』について」（『文芸』、昭31・12）
- ② 「『金閣寺』の作品分析」（『日本文学』、昭46・3。後に桜楓社刊『三島由紀夫その血と青春』では一部修正）
- ③ 「美のかたち——『金閣寺』をめぐる」（『文芸』、昭32・1、三島由紀夫全集補巻1収録）
- ④ 異なる解釈もある。
 - (1) 「佛と祖と羅漢は出世間の理想であり、父母と親眷は社会倫理の根本であるが、それらの名にとられて絶対と考えてはならぬ」（『仏教講座30・臨濟録』、柳田聖山、昭25・12、大蔵出版刊）
 - (2) 「仏に逢えば仏、祖師に逢えば祖師、羅漢に逢えば羅漢、餓鬼に逢えば餓鬼と一体になって自由に説法し」（岩波文庫『臨濟録』、朝比奈宗源訳注）
- ⑤ 「三島由紀夫おぼえがき」 P.103、昭56・11、立風書房刊
- ⑥ 下記の三つ
 - (1) 「『金閣寺』について——其の構造」（『日本文学』、昭32・2）
 - (2) 「『金閣寺』論」（『解釈と鑑賞』、昭42・4-6、後に「背徳の倫理——『金閣寺』」という題で至文堂刊『作品論の試み』に転載される）
 - (3) 「<文>のゆくえ——『金閣寺』再説」（『国文学』、昭51・12）

討議要旨

名古屋大学の涌井隆氏からサルトルの影響についての質問があり、発表者は『金閣寺』に関しては、それはあまり考えなくてよいだろうと答えられた。